HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ロシア帝政期南東コーカサスの村落における家族の姿
Author(s)	塩野崎, 信也
Citation	日本中央アジア学会報, 15, 92-93
Issue Date	2019-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.15.92
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88375
Type	journal article
File Information	JB015_007shionozaki.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ロシア帝政期南東コーカサスの村落における家族の姿

塩野﨑　信也

本発表では、「教区簿冊（метрическая книга, metrîk dəftəri）」と呼ばれる史料を用いて、ロシア帝政期南東コーカサスの農村における家族がどのようなものであったかを復元した。なお、南東コーカサスとはロシア領ザカフカースにおいてムスリムが大半を占めた地域のことで、大まかに言って、現在のアゼルバイジャン共和国に該当する領域を示す。

南東コーカサスでは、1813年にロシアに併合された後、段階的に統治制度が整備されていった。その中で1つの画期となったのが、1872年の「ザカフカース・シーア派ムスリム聖職者統治規程」とスンナ派の同様の規程（以下、両者を合わせて「1872年規程」）の公布である。1872年規程は、ザカフカースのムスリム聖職者（＝ウラマー）の管理・統制を目的とし、彼らを4階層からなるピラミッド状の組織に編成した。そのうち、最下層の聖職者である「ムッラー」は、「モスク教区共同体」（以下、「モスク教区」）ごとに1名設置された。モスク教区の規模は、80～90戸と定められており、村落部においては、1つの村がそのまま1つのモスク教区とされることが多かったようだ。

モスク教区の実際の規模と人口構成を知るために発表者が利用したのが、ティキャンルという村＝モスク教区に関する、「人別帳」とも呼ぶべき史料である。1881年に村のムッラーによって作成されたこの帳簿は、該当年におけるモスク教区の全住民の名前・続柄・生年を、世帯別に記録したもののようだ。それによると、ティキャンル村には、計91戸の世帯が存在し、569人が居住していた。モスク教区の規模は、1872年規程の定めるところにほぼ準じていると言えよう。世帯は基本的に、世帯主とその妻、世帯主の息子夫婦や未婚の娘らによって構成される。そこに世帯主の兄弟とその妻子、世帯主の未婚の姉妹、世帯主の母が加わることも多い。すなわち、世帯は基本的に男系親族で構成された、とまとめることができる。世帯構成者数の平均は6.3人で、拡大家族世帯や多核家族世帯の割合が高いという特徴が見られた。

このような共同体であるモスク教区におけるムッラーの業務の1つが、教区簿冊の作成と管理である。教区簿冊は、モスク教区の住民の出生・結婚・離婚・死亡を記録したもので、

それぞれに関する帳簿が別個に作成され、最終的にはある程度がファイルにまとめられた上で保管された。これらのファイルは、現在、アゼルバイジャン共和国国立歴史文書館にて相当数が所蔵されている。しかし、管見の限り、これらの教区簿冊を扱った研究は、現地研究者も含めて誰も行っていない。

さて、本発表の具体的な分析対象とされたのは、主にアシャグ･ゼイズィト（1877年）とジョルル（1881年）という2つの村＝モスク教区である。いずれもエリザヴェートポリ県ヌハ郡に属する。この両村を分析対象としたのは、該当年の教区簿冊のうち、離婚簿以外の3帳簿が全て揃っており、それらに記された情報が比較的詳細であるためである。

まず、結婚簿の記録を分析したところ、ジョルル村の新郎新婦3組はいずれもやや高齢で初婚を迎えているが、アシャグ・ゼイズィト村の初婚者は男女ともに10代の者が多いという特徴が見られた。1872年規程が定める結婚可能年齢の下限である15歳の新郎、13歳の新婦ともに記録がある。法令に反する若年婚が行われていた可能性もあり、例えば、13歳で2度目の結婚をした新婦などが記録されている。また、夫の方が何歳か年上の夫婦が多い、同村もしくは近隣の村の出身者との結婚が大半である、などといった傾向が両村に共通して見られた。

次に出産に関してだが、アシャグ・ゼイズィト村では、10代前半を中心とした、若年齢での出産が目立った。一方、ジョルル村の記録では、逆に高齢出産が多く、妻の年齢が40歳、50歳、60歳という信じがたい事例も見られた。これらの情報の解釈は難しいが、何らかの不都合な事実、例えば新生児が「不義の子」であることを隠すために記録が捏造された、という可能性も指摘できる。

また、妊娠と出産は、女性にとって命がけの行為であったようだ。アシャグ・ゼイズィト村の死亡簿は、「難産」によって死亡した3人の若い女性を記録する。ジョルル村では、記録された死亡者6人のうち3人が乳幼児である。記録にあらわれない死産や流産も含め、乳幼児の死亡率は高かったと推測される。特にこの時代、天然痘が大きな脅威となっていたようで、多くの乳幼児がこの病気で死亡した記録が残されている。

本発表は、これまでほとんど活用されてこなかったロシア帝政期南東コーカサスの教区簿冊を用いた研究の可能性を示した。今後、都市部も含め、より多くの教区簿冊を収集・分析することで家族史研究や人口史研究を進めるとともに、ロシア帝政期における社会の変化に関しても明らかにしていきたい。

（龍谷大学文学部）